邪馬台国その首都と版図*

Third century Yamataikoku, the land and its capital

小合彬生 **

by Akio OGO

Abstract

Following as close as possible to the original Gishi-Wajinden, it has been concluded by the author that a) Yamataikoku consists of 27 allied countries, b) the capital is Ito-no-Kuni where the male king dominates and c) the lady ruler Himiko is in the Fumi-no-Kuni sanctuary.

The centuries long studies have not yet been defined the palace location of the lady ruler Himiko. However, the recent conclusions are settling down into an alternative, Kyuu-shuu or Nara-Yamato.

This paper aims to finalize this argument by illuminating the exact site of Yamataikoku in northen Kyuu-shuu area, against illogical Yamato-dispute, through a civil engineering consideration.

1．まえがき

３世紀卑弥呼女王の国は、たしかに倭人の手で成立し、中国の歴史書「三国志」にその記録を止めている。[1)]

いわゆる魏志倭人伝の部分は、筆者の20数年にわたる研究によると非常に正確なことが明らかになっている。[2) 3) 4) 5) 6)]

地理、交通、都市、国土面積など、土木工学からの裏付けが、これからの科学的な版図の推察に役立ってくる。三国志魏書東夷伝倭人の項（以下、魏志倭人伝あるいは倭人伝と云う）約２千字に忠実に解明を進めてゆく。本論の前半においては、筆者の提案する邪馬台国の姿をとりまとめ、後半には九州説に対峙する、いわゆる、大和説の論理的な問題点を分析、批判する。

2．基本となる新しい見方

現在、女王卑弥呼の国についての議論は九州説・大和説が対立したまま停滞している感がある。注-1) 2)

先行する議論では、「軽視されていた」、つぎの２点に鍵があると筆者は気づいた。

第１点　「帯方郡からの使節は、伊都国に到り常駐する」こと
第２点.「女王国以北の国には『戸数と道里』を記した」こと

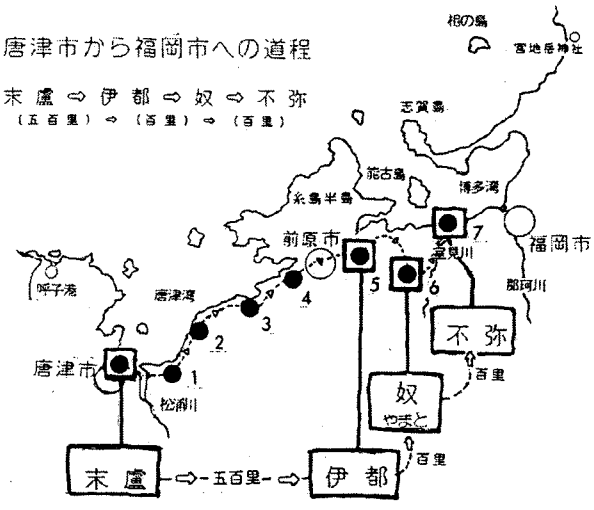
これから導き出される、合理的な解釈は、郡使が伊都に駐まったのは、伊都が目的地、倭の都であり、そこから女王のもとへは日帰りで往復できたことにある。

女王国は１千余家と小さい「不弥国」であり、帯方郡の南、万２千余里（じつは万７百余里）、行程は水行１０日陸行１月のところにあった。「女王国」は、その70倍以上も大きい「邪馬台国」とは、まったく異なる概念であると筆者は提言する。

3．邪馬台国・女王連合政府の所在

そして行政面から見ると、この「女王連合国」は、“首都”を倭王のいる伊都に、“祭祀の場”を卑弥呼のいる不弥に、「分散して配していた」のである。伊都にいる王は、新しいクニ、不弥の官を統括（統属）していたことも肯ける。

伊都・奴・不弥の３つの宮殿はごく近い。奴の都「山門」の至近に、その20分の１の規模で２つのクニが存在していた。



図―１、末盧-不弥間、７百里の図　(作成；筆者)

図－１は、唐津市から福岡市への道程を表す。このように、伊都、奴、不弥の三つの宮は、「お互い日帰り圏内にある」こと

---

*　keywords:　邪馬台国、魏志倭人伝、卑弥呼
**　正会員　鉄建建設株式会社　顧問
（〒530-0018　大阪市北区小松原町 2-4 富国生命ビル）

が一見すれば理解できる。

末盧から不弥までの区間には、「百里」おきに丸印が付けられている。末盧から伊都までの区間の５分の１をとって、その延長線上に「奴」と「不弥」の宮の位置を決めてゆく方式が、ここに分かり易く示されている。

「超大国、奴のしまこの宮」は、いまのＪＲ筑肥線「下山門」駅近くにあったと推察される。邪馬台の国とは、その「山門」にちなむ「やまと」の国だったと筆者は考える。

伊都は前原（まえばる）市との説が優勢であるが、中国人の宿舎は周船寺付近、前原市中心部より少し東よりにあったとすると、地理的な説明が容易になることも、この図は示している。

４．土木工学的に検討した邪馬台の版図

（１）国の広さ

邪馬台国は、記述では７万余戸の大国である。三国志・東夷伝の中で[7]、朝鮮半島南部の三韓諸国には、３世紀当時の国土面積が記されている。馬韓、辰韓、弁韓の３国で 14～15 万戸になり、国土は東西が日本海と黄海、南北には京城市と釜山市の間で、方４千余里を占めていたという（図？3、参照）。

これは、千里四方の土地に１万戸弱の居住密度になる。この４千余里は、現在の地図上、約 280 kmであるから、70 km四方の土地に１万戸弱となる戸数密度が計算できる。

この数字を利用すれば、邪馬台国の面積も推算できる。70km四方の１ロットの面積は、約 5,000 平方 km である。そこに、当時１万戸弱の戸数があった。同程度の戸数密度とすれば、７万余戸の邪馬台国は、約７倍、３～４万平方 km　と算定される。

「その他 21 ケ国」のサイズも同様に推定できる。それらのクニは、平均すると２千戸、１つのクニの領土は同じ居住密度を持つと仮定すれば、約４百里四方になる。現在ならば、約 20km四方である。目安としては、壱岐ノ島のサイズである。

５万余戸の投馬国も、同じ密度とすれば、２．５万平方 km くらいになる。

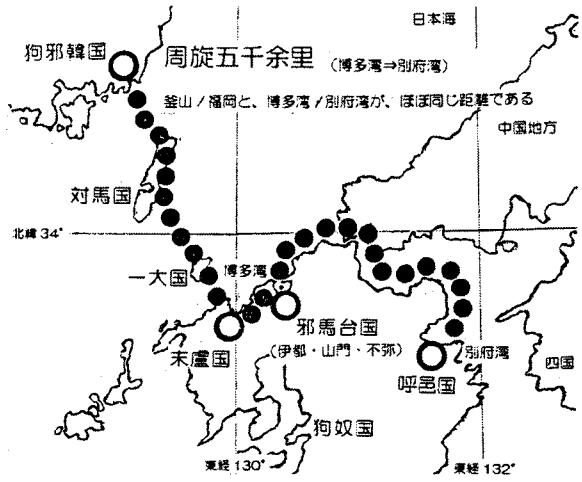
これらはいずれも、土木工学的にはラフな推定値であるが、たとえ概算値であっても、100 におよぶ邪馬台国候補地を、２～３ケ所まで絞ることが可能な、貴重な数値である。

（２）　距離を考える

倭人伝に用いられた「里」について、地理的な記述から、ある程度の工学的推測は可能である。とくに、図－１に示す区間は、郡使が実際に歩測した距離を、正確に表したものと考えていい。以後、この数値を距離の基準として用いることを提案したい。

また、京城～釜山間の鉄道営業延長 408km は、当時７千余里、唐津市～前原市間の JR 線 30 km が、陸行で５百里と記されている。この２例から、１里はほぼ 60mと知られる。

つぎに大切な距離に関する記述は、倭国の大きさを記して締めくくる記事「周旋五千余里」である。女王の所から船で巡って５千里ほどで、邪馬台国の東端 に達する。筆者の考える「女王国」の東は博多湾であり、国の東端ではない。博多湾の卑弥呼の宮から、国の東南端・別府湾まで周旋すると、図－２のように「五千余里」となる。これは筆者が、かねて提案しているところであるが、本論後半、大和説批判の項で詳述する。



図－２、「周旋五千余里」は末盧から呼邑まで（作成；筆者）

邪馬台国への行程は、「郡より女王の都している所に至る万二千余里」と締めくくられている。注意すべきは「邪馬台国までとは記されてなく、女王の都まで」と書かれていることである。

おおよそのルートを、図－３上に点線で示している。もし朝鮮半島西岸から南岸へ船で廻った場には、狗邪韓国までに、万２千余里の行程を費やしてしまうことが矛盾となる。

（３）　邪馬台国の版図

版図の作成には、「その他 21 のクニ」を順に並べることから始まる。こうして推察した邪馬台国の版図を、24 回研究会[3] に提案した。版図は、長崎県、福岡県、大分県、佐賀県にまたがり、東に周防灘があり、南にライバルの熊本県がある。

倭人伝には、火の山・阿蘇や関門海峡、瀬戸内海の記述もなく、第 14 番のクニ、為吾（イゴ、飯塚市）ですら、郡使は訪れてないらしい。遠旁といわれるクニも、意外や、女王国の近くにあったのである。（なお、邪馬台国を構成する小さい方のクニを、カタカナのクニで表現しているので注意されたい）

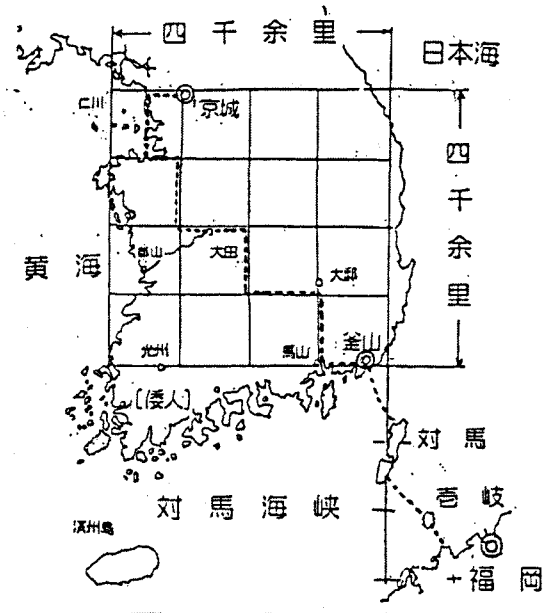
①シマノクニは糸島郡あたり、②ミヤジのクニは宮地岳・津屋崎付近、水巻町の③イヤのクニ、洞海湾の④クキのクニ、行橋・箕島の⑤ミナのクニ、中津市の⑥ココツ、宇佐市の⑦フコ（謎の深池あり）・・・と順に比定して行くことができる。

その他、別府市には⑪コユのクニ、丹の産地は産物にちなむのか⑫カナスナのクニ、奴の最強のライバルは地理からして⑭のイゴ（飯塚市）である。⑬のキのクニは、⑫と⑭の間にあればいいが、ここでは仮に大分県の方に図示した。⑯ヤマのクニ、⑰クジュウのクニ、⑱ハリのクニそして⑲キイノクニと続く、⑯から⑲の４つのクニは以前から並んでいると思われていたが、全体の配置の中で正しく順に位置づけられた。西の端は佐賀・吉野ヶ里の⑳ウナのクニである。最後は再度記されている「奴」のクニである。南は、狗奴国（熊本県など）に接する。

その他 21 のクニは、記載順に番号を打った。クニグニが２組、時計回りでチェーン状に並べられていたことがよく分かる。これまでの研究では、その他２１のクニを順に並べることに成功した例がないと思う。

古代の地名が、現在の地名にまだ受け継がれていることが、つぎの例から、「かなり正しい」と言えるようである。

倭人伝の国名（現在の地名）	倭人伝の国名（現在の地名）
斯馬国　（糸島郡のしま）	華奴蘇奴国　（辰砂の産地）
巳百支国（宮地のクニだった）	為吾国　（伊川・伊賀・飯塚）
伊邪国　（伊左座・水巻町）	邪馬国　（邪馬渓町・山国町）
都支国（郡支・クキは洞海湾）	躬臣国　（九重町・玖珠町）
彌奴国（行橋・箕島あり）	巴利国　（杷木町）
不呼国（宇佐・深池あり）	支惟国　（基山町）
呼邑国（児湯・あた津は別府）	奴国　（奴は山門に関連か）



図―3.　3世紀郡使の旅路、水行１０日陸行１月（作成：筆者）

5．筆者の結論は九州説

女王連合国の機能は、奴の都心内で「伊都と不弥」に配分されていたのである。これまで「謎」とまで云われてきた邪馬台国のありかや、版図、その統治機構まで、これで嘘のように明らかにされてしまった。

帯方郡から倭国に出向いた使節は、「伊都に到り、そこに駐まる」と読むのが正しかったのである。「伊都」の用字も、「都」の意味が分って使われている可能性が充分ある。

伊都に王がいる。帯方郡使節、監察官である一大率もいる。ここが邪馬台国の軍事・外交・行政上の首都なのである。このあと、郡使は、伊都から南へ旅を続ける必要はない。

そこで、陸行水行の日数は、郡からの行程以外に、表すべきものがなくなるのである。

筆者の邪馬台国論は、西区愛宕の丘の上、「うみの宮」が祭祀の中心であり、女王ひみこがいたと結論する。邪馬台国でただ一人の「王」は伊都にいて、代々皆女王国の面倒をみていたと解釈する。原典では、伊都に「世有王、皆統属女王国」と書かれている。この部分は、できるだけそのまま受け取るのがよい。

この伊都、山門、不弥の距離を、いまの東京になおせば、高輪・丸の内・上野公園くらいの位置関係になる。

結論を繰り返せば、筆者の論は「九州説」である。

6．大和説の矛盾を工学的に指摘する

永年九州説に対抗してきた大和説についても、今回は分析を進め、その論理上の矛盾点に一言触れておかねばならない。筆者の論は、「奈良県に卑弥呼がいる説を否定する」ものであるが、ともかく大和説の概念をとりまとめ、問題点を吟味する。

大和説は、まず卑弥呼の邪馬台国を近畿に持ってくるため、不弥国から出発し、投馬（とうま）を経て邪馬台国に「至る」60日の旅を、郡使に追加している。これが無理な原典解釈を強いており、ほとんどの問題はそこに起因する。

(1) 文献に誤写がある

大和説論者は、まず、倭人伝を含め古い文書は、永年にわたる複写の間に、必ず誤写が生じているとする。「不弥より南へ水行する」記述の箇所は、じつは「東」と書かれていたが、誤写により南となった。学者もこう主張する。しかし、「女王国以北」が「以西」でないのは、どう見ても矛盾している。

(2) 日本列島は南北に長かった

この説明が矛盾を示したので、これに代る案が提出された。朝鮮半島で15世紀に作られた「混一疆理歴代国都（こんいつきょうり、れきだいこくと）之図」によると、日本列島が南北に長く描かれている。「伊都の南に大和があった」と信じられていた証拠であるという。これは、僧行基（ぎょうき）にちなむ行基図を使用したせいらしい。その図では西方浄土を上にして地名が記入されている。これを、北を上とする蒙古系の図と合体（混一）させた際、わが国が南北に長く描かれてしまった。

卑弥呼の時代から千百余年後に作られた地図を根拠とするのは、少し無理があると筆者は考えている。

(3) 距離の検討に疑問がある

帯方郡から女王の都までは「万二千余里」と書かれている。伊都のクニまで、万５百余里であるから、大和説論者は残る千５百余里で奈良県の大和に達する説明をしなければならない。

３世紀の１里がどのくらいの距離だったか、筆者の研究を示す。末盧～伊都間の５百里は、余里の「余」の字がついていない。郡使たちが歩測した正確な距離だと理解している。

現在、唐津～筑前前原駅の鉄道距離は30ｋｍである。これを用いて計算すれば、「百里」が６ｋｍになる。そうなると、大和説論者のいう女王の都は伊都から90km付近になくてはならない。

さて、近畿圏の奈良に女王の都を想定するためには、ここで次元の異なる「時間」つまり日数を導入し計算不能とするか、不弥国から東は「倭人の里数」が使用されているらしい、あるいは、「誤写」だと主張せざるをえない。

(4) 周旋すれば「五千余里」の記述

周旋すれば５千余里の記述は、大和説のアキレス腱とされている。大和説では、国の端まで周囲を船で廻ると、５千余里となる航跡図が、どうしても描けないのである。

まず他の５千余里を参照しょう。朝鮮半島南部の狗邪韓国から女王の都までが、記事では５千余里のはずである。

倭人伝には、邪馬台国の周囲を巡った距離が、それと大きく変わらない５千余里と書かれているのである。博多湾の卑弥呼の宮から、船で周旋、関門海峡を通り、12 番目のクニのある別府湾まで行くと、平均的な国幅である４百里の 12 倍、ほぼ５千余里になる計算である。**図－２**に示したところでは、原典の記述にあうよう、国を周旋して五千余里とは、末盧のクニから別府湾にあった呼邑のクニの間とし表している。

大和説では、近畿圏まで瀬戸内海を大航海している関係から、どうしてもその数倍の距離になってしまう。大和説論者としては、これは無視する他はない。

重要なことであるが、この部分の記述は、九州説でないと、工学的・物理的に説明がつかない。

(5) 行程の日数は説明しにくい

大和説では、不弥国から再出発して、投馬国へ水行 20 日、続いて邪馬台国へ水行 10 日と陸行 1 月、合計 60 日の大旅行になる。90km 前後の旅にしては、日数が多すぎる。それで、１月は 1 日の誤写ではないかと疑う人も出る。いずれにしても 90km のこと、大和説の説得力は大きくない。

(6) 倭人伝は偽書説も出る

最後の手段は、倭人伝そのものの信憑性に疑問を訴えることである。中国人は伊都までは来たが、大和にいる女王には会わず、いい加減なレポートを作った。倭人伝は伝聞であり、信用してはいけない。あえて云えば、倭人伝は偽書であると、かなりの極論になる。郡使たち中国人の忠誠心も共に疑われる。第一項の誤写疑惑も同じ、中国人は国の正史の筆写に際し校正を怠ったのである・・・・しかし、その証拠はない。

いわゆる「伝聞説」であるが、使者が伊都に駐まった点は似ているが、中国人使節の忠誠心を疑い、倭人伝の内容をも大いに疑う説ではある。大和説論者に支持されるのだが。

(7) その他 21 のクニグニで困る

大和説の問題点は、その他 21 のクニグニの大きさがよく分からない、その結果、邪馬台国全体の戸数計算がまったくできないなど、かなり苦しい説明が続くことにある。

そして執拗に 21 回も順番に並ぶと記されているクニグニを、順に並べることが、非常に難しいことも知られている。２、３試みた人がいるが、現在の地名と関連がとれなかったり、順番が乱れて、一筆書きのようにクニグニを繋ぐことが無理であったりする。

(8) ３世紀の瀬戸内海は危険

たとえ、郡からの使節が、瀬戸内海沿いに、邪馬台国以東の海域を、何日も航海することになっても、よほど治安のいい時でないと、大抵は、海賊の餌食となってしまう。３世紀の大航海は、かなり無理があると思える。

(9) 「狗奴の国」の比定がしにくい

さらに辛いのは、21 番目の奴国の南側に接して、「狗奴の国」を比定することが難しいことである。奴のクニだけで２万余戸、邪馬台国全体では７万余戸、これと戦って、ある時は勝てるほどの大国・狗奴は、奈良県にあった「大和国」の南側には、とうてい存在し難いのである。熊本と鹿児島両県くらいの大きさがないと兵力不足になる。

(10) 甲音乙音論争に決着を

むかし、倭人には甲音乙音の差があったとして、九州には「やまと」がないと否定する人もある。万葉集の言葉や音を研究した結果、イとエとオに甲、乙、２つの母音があったという。奈良時代では、ひみこの時代と差があり過ぎるが、ともかくも、「やまと」の「ト」の音韻が問題になっている。

邪馬台国の「台」は乙類のトであり、山門の「ト」は甲類の「ト」であって、昔の人が間違うはずがないという理由である。

しかし、筆者はこれをもっと簡単に考えている。３世紀、倭国に来た書記官は、倭人の発音を、たぶんそのまま漢字で書き留めただろう。しかし、郡か洛陽において、倭人伝を執筆するとき、夷（えびす＝野蛮人）どもの言葉を「卑字」に置き換える作業があったと考える。この時点で、甲音乙音などお構いなしの書き換えが行われた可能性がある。よく知られた例では、卑、邪、馬、狗、などなどの「卑字」に書き換えたことと思われる。

また、「邪馬台国の臺はけしからん、天子の住まう場所を臺という。これは壹にしろ。」というような書き換えもあったはずである。「臺・台」が乙音であってもなくても、壹になってしまえば関係なし。思うに甲音乙音論争は、大和説論者の陰謀であり、引っかかってはならないのである。

(11) 不弥国のレゾンデートルは？

先行する研究の多くは、不弥国のレゾンデートルが不明確であった。そして研究者は、不弥のクニから南に向け、港もないのに船で出発しようと、原典と格闘していた。

しかし、不弥の宮に卑弥呼がいるならば、さらに、ここから南へ旅立つ必要はまったくない。「邪馬台国九州説」にして始めて不弥のクニのレゾンデートルが明確になるのである。

(12) 卑語に置き換えたのは固有名詞だけ

この過程でよく分かったが、倭人伝の記述は、「倭人語固有名詞を漢字で書き表すとき」以外は、非常に正確だったことである。なんでも都合の悪い文字を誤字・誤写扱いにするのは間違いである。

帯方郡からの使者は目的地、「伊都」へ到りそこで、情報を収集整理した。それでよかったのである。

強いて云うならば、誤字、誤写、偽書など原典の記述を疑わなければ、矛盾を多く抱えすぎた大和説そのものが、成立しなかったのである。これで邪馬台国問題も、ようやく正解に達したと筆者は考えるが、ぜひ皆さんのご討議をお願いしたい。

7. 卑弥呼の墓

卑弥呼が亡くなったとき、葬儀・墓について郡使の報告が詳しく伝えているが、筆者は伊都の王により、その葬儀が営まれ伊都にいた郡使一行がそれを記録したと考えている。

卑弥呼のいた丘は狭くかつ聖域であるため、女王の墓は、今の前原市内に営まれたと推察する。候補地としては、以前、原田大六氏の講演を聞いたが、「平原遺跡の埋葬者は老齢の女性で、頭を西に 40 枚ほどの中国古銅鏡に囲まれていた」という。

有名な青銅鏡コレクターの墓がここにあると思うのだが、それが「卑弥呼の墓」である確度は高い。

三角縁神獣鏡は、卑弥呼の鏡という科学的な証明はいまだ終わっていない。古墳時代の奈良付近で多く発掘されているが、平原の墓にはひとつだに埋葬されてない。鏡のコレクターだった卑弥呼は、古く格式の高い漢鏡を好んだと見られる。

先日、現地の歴史公園を訪れた。埋葬点の中心から四方を見ると、西に斜面がある。歩測すると約50歩から先は崖で下に落ちる。もし、ここに塚を築くなら、半径は50歩になるはずと観られる。これが、測量学のルコネッサンスである。こてと刷毛で土を削る考古学と大いに異なるが、土木工学的アプローチを試みたのである。

現地を歩測することにより、直径「百歩」と書き残されている「卑弥呼の墓」の確度を、これで一歩高めたのではないだろうか。工学的発想の成果となれば幸いである。

8．結　論

邪馬台国論争の分かれ目は、３世紀の倭人伝を信用するか、しないかにあった。信用しない人たちが、原典をいろいろ改変しながら、卑弥呼女王の国を探し回った。

しかし、そんなに大騒ぎすることはなかったのである。書かれたまま倭人伝を読めば、邪馬台国は見つかっていた。なにが何でも奈良へ邪馬台国をもって行く「魂胆」さえ捨てればよかったのである。

この邪馬台国がどうしても見つからなかった理由は、その「都心の姿」が理解しにくかったからと思われる。二つの衛星都市に、連合政権の機能が配分されていたと考えることで、原典に矛盾のない倭人国の姿が見えてきた。

この歴史上の議論に、当学会そして当研究会で、自然科学的あるいは土木工学的解明を試みる機会を得られ喜んでいる。

そして、当学会において、これからもこの研究、議論が続けられることを心より期待している。　**(平成１７年３月)**

参考文献

１）石原道博編訳：『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・随書倭国伝、中国正史日本伝（１）』岩波書店、1988年。

２）小合彬生：土木工学で邪馬台国に挑む、pp43-48、土木学会誌「ひろば欄」、土木学会、平成元年10月。

３）小合彬生：伊都までの水行陸行と耶馬台国『第24回土木史研究会講演集』pp, 323-330 土木学会土木史研究委員会、2004年。

４）小合彬生：三世紀奴（な）国の行政組織・みなと・海運、『港湾経済研究』No41、pp146-156、日本港湾経済学会、2003年。

５）小合彬生：伊都の王が女王国を統属する、『兵庫歴研』第19号、pp26-31、兵庫歴史研究会、平成15年。

６）小合彬生：三世紀ひみこの宮への陸行水行、『兵庫歴研』第20号、pp30-38、兵庫歴史研究会、平成16年。

７）今鷹・小南・井波共訳：『三国志（Ⅱ）』世界古典文学全集・第24巻B、pp-302～305、筑摩書房、1993年1月。

注―１． 先行する研究の総括―１．

―邪馬台国の比定地、大きさ、行程の分析などの一覧―

まず、佐伯有清著『研究史、戦後の邪馬台国』昭和50年9月、吉川弘文館に見られるように、研究史が複数存在する。それほど研究は多い。ここでは、もっとも新しい形態であるネット上の「邪馬台国大研究」井上修一氏のホームページを紹介してみよう。http://inoues.net/yamataikoku/waj.html の「邪馬台国比定地一覧」がよくまとまっている。この表には、九州論者76人（うち福岡県38人）、大和説論者（舎人親王、伴信之、内藤虎次郎ら）39人、その他地域（徳島からジャワ、エジプトまで）17人が、筆者名、比定地、卑弥呼は誰か、ともども記されている。著者が当初示した２論点から、大和説、その他地域説をまず棄却する。九州説の中でも、邪馬台国が７万戸分の国土面積を有していたと分析している研究は少ない。ともかく、卑弥呼の都が「福岡県内」にある諸説を示す。筑紫山門説は、新井白石、津田左右吉、榎一雄など10人、筑後川流域説は、甘木市を含めれば安本美典らも加わり16人になる。福岡平野に候補地を挙げる人は、井上光貞、和辻哲郎、大林太郎、森浩一、松本清張、古田武彦、奥野正男ら12人があげられている。しかし、「この中には衛星都市・伊都と不弥のカップル」を連合の首都とする説はない。

注―２． 先行する研究の総括―２．

―土木工学から見て、国土面積、首都の位置、交通、その他21国の番号順配置などが合理的に行われているか。―

当論文の基本は物理量からの検証である。これまでの研究者は、卑弥呼の都を求めるのに急で、国の面積に思い至っていない例が多い。現在の「市町村規模」の邪馬台国はありえない。このスクリーニングで100以上と言われる候補地は、わずか２～３ケ所に絞られる。具体的に邪馬台国の大きさを、3-4万平方km と計算した例を筆者は知らないし、江戸時代の大名領に換算して、２百万石程度と推理した例も寡聞にして聞かない。

末盧のクニから２千余里で女王の都に至ることは知られていたが、そのうちの５百里に、実測歩行記録が含まれていることに気づき、検討している例は少ない。

ここが鍵になったのであるが、「衛星都市、日帰り圏」という考え方に気づいた研究者は、いまだないといえる。

「水行十日陸行一月」という旅行日数の解釈では、最近、わが解釈に近いものが見られるようになった。しかし、陸行距離延長が東海道53次と同じであると指摘した例は聞かない。

その他21ケ国を順番に並べる研究は数例あるが、順番のとり方に錯綜が多く、また現在の地名と関連付けている例は少ない。